

王様と私

会員 須長 駿太郎



人による支配？

私が弁護士となってまもなく1ヶ月がたとうとしている。民事事件を担当すれば会計士の方にお会いする機会も当然多いのだが、私が「会計士」という言葉を聞く度に思い出す人物が1人いる。それは私の父である。

彼は私の人生劇場においては最重要人物かつヒーローである。会計士であった父は、今は監査法人を辞めて独立し、自宅で税理士をしている。星一徹ばりに頑固な父は、まさしく我が家の暴君であった。

彼は幼い頃に父親を亡くしたせいか、いい父親たらんと努力し過ぎたようである。中学生の私に東大受験レベルの数学を解かせて出来ないと言ったり、「食事中の私語厳禁」と命じておきながら突然「何故うちには家族団欒がないんだっ」と叫んで箸を投げつけたり、明らかに行き過ぎた教育理念を持っており、かつ持ち前の勤勉さでそれを押し通そうとするのである。

しかし、教育熱心な半面、私の教育資金にと母が積み立てた学費を家族に無断で株につぎ込んでしまうなど、その理念は余りに恣意的であった。

そして、監査法人を辞めて独立した後は、自分が自宅で仕事をしやすくするために、母に社労士をとよう命じ、母は3年がかりで社労士の資格をとった。それが案外依頼が多かったため、私も母の地盤を引き継ごうと目論み社労士をとったところ、「親の力を当てにするな。世の中そんなに甘く

ない！」と一喝された。あてが外れた私は心機一転、司法試験を目指すことにした。

いつか王様を越える日

司法試験の受験中は、「大学を卒業したのだから家に金を入れろ」と私に新聞配達のパイトをするよう命じた。他のパイトでもよかったはずだが、自分がかつてやっていた新聞配達を私にもさせたかったらしい。お蔭様で朝刊夕刊の配達があるため、細切れにしか睡眠がとれず、おまけに明け方に雨に打たれる辛さときたらなかった。特に冬の雨の日については、今でもちょっとしたトラウマである。

しかし、何か辛い事があっても「あの冬の雨の新聞配達に比べれば…」と乗り越えられるのも、弁護士となれたのも、今の自分があるのは残念ながら暴君のおかげと言えなくもない。

先日、私の就職祝いの席で父は「これで一緒に仕事ができるな」と嬉しそうに話していた。公園で「男と手をつなぐ趣味はない」と幼い私の手を振りほどいた父。彼と仕事を通じて手をつなぐ日は来るのだろうか。その時は私を一人前の弁護士として父に認めさせてやりたい。そしてその時、私は男として父を越えるのだ。

勿論日々の業務のやりがい仕事へのモチベーションとなっているのだが、動機は多いに越したことはない。

父を越える日は着々とやってきている。勿論楽しみではあるが、何だかさみしい気もする。